

海外調査報告

●10/5～10/17 にかけてカンボジア及びバングラデシュにて技能労働者送り出し国の調査が実施されました。今回は、調査に参加した当社社員の報告を掲載いたします。

●調査概要

我が国では建設技能労働者の減少が進み、人材確保が喫緊の課題となっている。一方、外国人労働者数は年々増加しており、建設業においても外国人労働者の役割は今後さらに重要になると考えられる。また、技能実習制度から育成就労制度への移行が予定されるなど、外国人労働者を取り巻く制度も転換期を迎えている。

こうした状況を踏まえ、技能労働者の送り出し国の現状を把握することを目的として、調査機関が実施する現地調査に参加し、今後、技能労働者の送り出し国として有望と考えられるカンボジア及びバングラデシュを訪問した。本調査では、送り出し機関の状況や教育訓練体制、就労を取り巻く環境等について現地で確認を行った。

●調査結果

カンボジアについては、日本に対する印象は概ね良好であり、日本で働くことに興味を持つ人材は一定数いるが、就労先選択において賃金水準が重要な要素となっていることが確認された。円安の影響もあり、日本と比較して賃金面で優位性のある韓国を選択する傾向があるとの声が聞かれた。また、日本での就労にあたっては日本語の習得が求められることから、言語面でのハードルを高く感じる人材も一定数存在しているようである。

送り出し体制については、韓国が政府主導で調整を行っているのに対し、日本は企業単位での対応が中心となっている点に違いが見られた。こうした制度の違いが、就労先選択に影響を与えている可能性もあると感じられた。一方で、人材の特性としては、真面目で素直な性格の人が多いとの評価が多く聞かれた。仏教国であることから、宗教上の制約が比較的少ない点も、受け入れ後の就労環境を考える上での特徴の一つと考えられる。

バングラデシュについても、日本に対する印象は概ね良好であり、日本で働くことに興味を持つ人材が一定数いることがうかがえた。一方で、日本語教育の環境については課題があることが確認された。現地では日本語を指導できる人材が限られており、日本人教師の派遣について日本国政府へ要請が行われている状況である。

人材の特性としては、環境の変化に対する柔軟性や適応力が高いとの評価が聞かれた。ただし近年は、事務職などホワ

イトカラー志向が高まりつつあり、建設分野への人材確保においては、職種選択の変化を踏まえた対応が求められると考えられる。報酬面や政府間の支援体制については、韓国との違いを指摘する声もあり、加えて中東諸国への就労を選択する人材も多いことから、国際的な人材獲得競争の中に置かれている状況がうかがえた。また、日本での就労を希望する人材の中でも勤務地については本州を希望する傾向が見られ、北海道が就労先として十分に認知されていない状況がうかがえた。

●現地での体験と気づき

現地調査の合間には、街の様子や生活環境に触れる機会もあった。カンボジアでは、夜間でも比較的安心して街を歩くことができ、生活環境は想像していたよりも落ち着いた印象を受けた。私自身、現地での食事は大きな不安はなく、口に合っており、日本食を選択できる環境も整っていたことから、カンボジアの方が日本で生活する場合には比較的適応しやすいのではないかと感じられた。

一方、バングラデシュでは交通量が非常に多く、移動の際には注意が必要だと感じる場面があった。私自身は現地の食事について大きな支障はなかったものの、生活環境や交通事情の違いから、バングラデシュの方が日本で生活する場合には戸惑うことも想定される。こうした点を踏まえると、受け入れ後には生活面や安全面に関する丁寧な説明や、継続的なフォローが重要になると考えられる。

これらの体験を通じて、教育体制や制度といった枠組みだけでなく、実際の生活環境を含めて対応することが重要であると感じた。

●まとめ

今回、調査機関が実施する技能労働者送り出し国の現地調査に参加する機会を得たことで、資料だけでは把握しきれない現地の状況を知ることができた。カンボジア及びバングラデシュの両国において、教育体制や送り出しの仕組み、就労を取り巻く環境について現地で確認を行う中で、外国人労働者として一括りにするのではなく、国ごとの事情や働く人たちの考え方に目を向けた対応も重要であると感じた。

